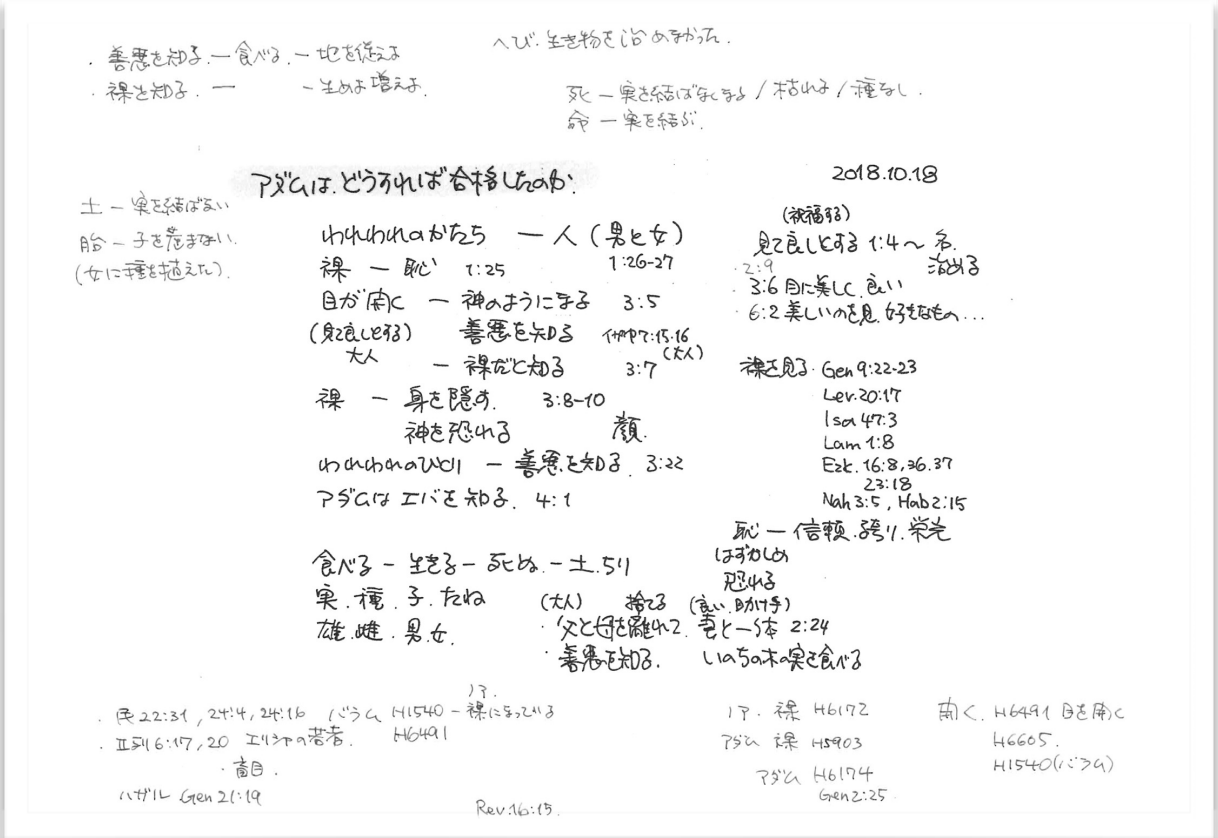
創世記2-3章

裸と恥、善悪を知る



裸と恥。善悪を知ることと裸。創世記の2章のアダムが造られたところ。2人とも裸だったけれども恥ではなかったというところから、堕落のストーリーが始まっています。

サタン、蛇が「取って食べると目が開いて、神のように善悪を知る者になる。取って食べたあとに2人の目が開いて自分たちの裸を知る。」そして、神様は、「あなたが裸であるのを誰が告げたのか。食べるなと命じておいた木から取って食べたのか。」ということを言います。最後に、「人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。」ということなのですが、この善悪を知るということと、裸であることを知るということが、どうも似ていることになっています。

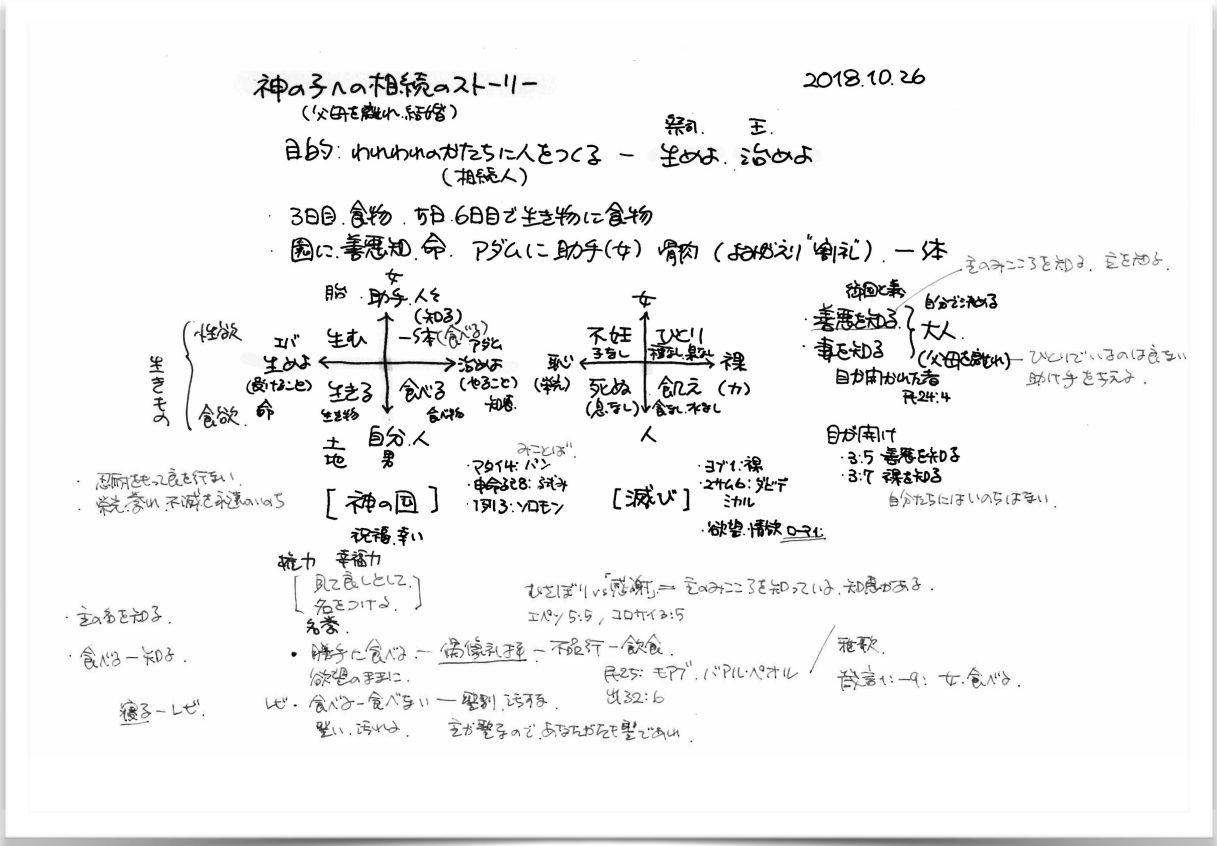
取って食べたら裸だということがわかる。善悪を知る。目が開くということはどういうことなのかと、まず考えてみると、大人になるということだと思いますね。2人はまだ試されていない子どもの状態なので、裸が恥ではない。何も持っていないということは、恥ではないということですね。取って食べたら本当は善悪をさばく全て自分で決めることができる者になる。その意味で、父と母を離れて大人になるというための訓練だったということです。

それを、「取って食べないこと」によって悟らなければいけなかったのに、「取って食べて」悟ったというか知った。そういう意味で、悪側に立って知った。本来は取らないで、善側に立って、良い側に立って知るということが要求されていたものだと思われ

ますけれども、その悪側に立って知ってしまいましたので、自分たちの裸が恥となった。

本来、隠すものだったのでしょうね。アダムとエバがずっと着ないで裸だということではなかったのだと思います。何か衣を着るはずだったのですけれども、2人の目が開いて、裸であることを知る。何も持っていないということが…、王様のようになるはずなのに、裸の王様のことが分かったというような感じですね。

何も持っていないということは、本来、神様の前で、裸であるということが恥ではないということは、例えば、ヨブ記の中で、ヨブは「自分は裸で生まれましたから、裸で帰ります。主よ。ああほむべきかな。」と言って神様の前で全て取られて…。ソロモンのような富豪だったわけです。東の国でいちばんの富豪で、その財産すべて与えられたのに、すべて取られる。丸裸になる。でも、神様の前でそれを恥とはしないという知恵のある主を恐れるヨブ。



ダビデも天幕がもう一度戻ってきて、新しく契約の箱が、そのあるべき場所に戻ってきたときに、裸のようになって踊っている。それを見たミカルは、あざける、辱める。裸を辱めるということですけれど、ミカルは、子どもがなかったと言って話が終わります。裸であることと(何も持っていないということですからね)、子がいない、子を産むことができない、食べ物がない。これが、裸だということに2つ含まれていると思います。ミカルは不妊だった。これは、恥なのですね。裸をはずかしめた者が、恥を見るというようなところで、裸と恥がここにも出てくると思います。

「善悪をまだわきまえていない、わたしはまだ小さな者です。」とソロモンが言います。ソロモンが言っているのは第2歴代誌1章のところで、「わたしは若くて力もなく、

知恵がありません。」と言って、自分で認めている、主を恐れているので、神様は知恵を与えてくれるわけですよね。それが、知恵なわけですよね。ダビデも全ては主のものです。主にお返しするだけです、私たちが捧げているのは、あなたが与えてくださったもの以外に何もないということを、第1歴代誌29章で言います。自分たちは土から生まれて、すべては神様から与えられているものだということを悟っているということが、善悪を知っている。正しい意味で知っているということですけれども、悪側に立っていますから、持っていないということが、恥になって、葉っぱで隠しているというのが、裸と恥。それで、善悪を知るというのが、大人になる。へりくだる。正しい意味で主を恐れる。主を怖がったんだね。悪の側に立って神様に会うと怖い。正しい側に立って神様に会う時には、恐れているというおもしろい並行があると思います。

神様はわれわれの一人のようにと、善悪を知るものになったと言っているときに、悪側に立って知るものになった。間違った形で大人になってしまった。それで、そのまま永遠に生きないようにと言って「いのちの木」から遠ざけたということですので、「目が開けて善悪を知る」「目が開けて裸であることを知る」ということが、ここで、並行しているのだと思われます。